



2021
8月

園だより

認定こども園 下関短期大学付属第二幼稚園
山口県下関市彦島塩浜町2丁目2-21 ☎ 083(266)5821

うみは ひろいな おおきいな…

夏到来。待ってました！とばかりにセミの合唱。コロナなどおかまいなく、羨ましい限りですが、幼稚園では合唱は残念ながらまだおあずけです。とはいえ、歌には子どもたちの心を落ち着かせ、明るく元気にしてくれる、そしてやさしくしてくれる力があります。コロナ禍であっても幼児教育に欠かすことのできないものです。各担任も、それぞれの年齢や季節に合わせて、童謡や唱歌、わらべうたを取り入れ、聴かせています。6,7月によく聞こえてきた歌から…。



「しゃぼん玉」(詞：野口雨情、曲：中山晋平)は、大正時代に作られました。わずか2歳の幼い娘を病気でなくしたときに作ったとも言われていますが、当時の極貧の世相を歌っているのだそうです。(「唱歌・童謡ものがたり」～読売新聞文化部～)この二人のコンビによる作品に「黄金虫」(こがねむし)があります。お金持ちの歌にしてはなぜか短調なので、哀愁が漂ってきますね。

「うみ」(詞：林柳波、曲：井上武士)が発表されたのは、太平洋戦争が始まる昭和16年。文部省が、小学1年生にも海国日本の軍事教育を進める教材をと、上の二人を任命しましたが、できた作品は戦争など微塵も感じさせない穏やかで明るいものでした。今でも共通教材として扱われています。しかし、この歌で多くの子が太陽は西に沈み月は西から昇ると思い込んでしまうところが厄介です。

「あめふり」(詞：北原白秋、曲：中山晋平)は、「しゃぼん玉」と同じ時代でありながら、こちらは裕福な家族像が浮かんできます。突然の雨、傘を持ってわざわざ子どもを迎えに行くほどの余裕は、当時どこの家庭もなかったはず。それはさておき、雨降りも楽しく遊びに取り込むのが子ども。その上大好きなお母さんが一緒に歩いてくれるのですから心は弾みます。(最近の子は、「傘なんかより車で迎えに来てよ」と言いそうです。)この歌が今なお歌われている一番の理由は、母子の絆の強さにあると思います。お母さんがいてくれるから男の子は「きみきみ このかさ さしたまえ」とやさしい行動がとれるのです。お母さんのやさしさが子どもの心にもしみ込んでいるようですね。

母子の絆を歌った童謡の代表は「ぞうさん」(詞：まど・みちお、曲：團伊玖磨)ではないでしょうか。短い詞でありながら、象が象であることの喜び、子が母を慕い、誇らしげに思う気持ちが自然に伝わってきます。三拍子がまたいい。周南市出身のまど・みちお氏は次のように言っています。

「ぞうさん おはなが ながいのね」と言われた小ゾウは、からかいや悪口と受け取るのが当然ではないかと思うんです。この世の中にあんな鼻の長い生き物はほかにいませんから。(中略)

ところが、小ゾウはほめられたつもりで、うれしくてたまらないというふうに「そうよ かあさんもながいのよ」と答える。それは、自分が長い鼻をもったゾウであることを、かねがね誇りに思っていたからなんです。小さい子にとって、お母さんは世界中、いや地球上で一番。大好きなお母さんに似ている自分も素晴らしいんだと、ごく自然に感じているんですよ。(まど・みちお著「いわずにおれない」集英社文庫)

幼い子どもは、リズムやメロディーよりも歌詞への関心が高いと言われています。特に、身近な内容で、短くわかりやすい詞が受け入れやすいそうです。そこにやさしさや愛情が、美しい日本語とメロディーで紡がれることによって、純真な子どもの心をとらえ、世代を超えて歌い継がれていくのでしょね。童謡・唱歌はまた、高齢者を始め、障害のある人や海外で暮らしている日本人にとっても心のふるさととなっています。幼児期のうちに、多くのすぐれた童謡・唱歌との出会いを作っていくのも私たちの役目だと思います。そして、マスクをはずし、みんなで大きな口をあけて、セミに聴かせてやりたいくらいの合唱が再びできる日を待ち望むばかりです。(園長 寺本 明生)